

六、後漢

一、〔¹〕…〔²〕…〔³〕を対象とした学問。

「経」―織物の「たて糸」の意。最初から最後まで貫いていることから、永久の真理の意味に用いられ、聖人が述作した典籍も真理が記されているとする。

・〔⁴〕…古代の占いの書。陰と陽を六つずつ組み合わせた六十四卦によって自然と人生の変化の法則を説く。卦の内容を表した卦辞・爻辞を「経」、その注釈・解説を「伝」という。

・〔⁵〕…古代の帝王の事跡。堯・舜から夏・殷・周の王者およびそれを補佐した人々の発言を記録する。孔子が編纂したとされる。

・〔⁶〕…最古の詩集。孔子が編纂したとされ、春秋時代から士人の必読の教養書。

風（各国の民謡）・雅（祭祀や宴会の時の詩）・頌（祖先の徳をたたえる詩）の三つに大別される。

・〔⁷〕…古代の習俗・儀礼・制度・祭礼などを記す。『儀礼』（士大夫の冠婚葬祭の作法）・『周礼』（周代の官制）・『礼記』（礼に関する解説など）を「三礼」と呼ぶ。

・〔⁸〕…魯を中心とした年代記。孔子の著作とされる。歴史的事実の裏付けを重視する『左氏伝』と、孔子の意図を明らかにすることを重視する『公羊伝』『穀梁伝』を「三伝」と呼ぶ。

二、王莽期から後漢へ

二一、〔⁹〕の出現

〔¹⁰〕…自然の変化を説明する五行思想に基づきながら、未来を予言する説。

讖…自然現象そのもの、あるいは自然現象によって出現した文字で、未来を予言。図讖、符命。

「緯」…「よこ糸」の意。経書の内容を踏まえつつ、それが未来でどのように出現するかが説かれており、神秘的な言説を多く含んでいる。

緯書は経書を補完するものとして書かれ始めたものだが、孔子が書いて秘蔵していたものとされていた。↓〔¹¹〕

図書…古代から聖王が世に出現する際にあらわれるとされる河図・洛書。（53頁）

これらは漢王朝の正当性を主張するものであり、前漢王朝を立て直そうとする思想の反映。

二二、思想家たちの活動

・〔¹²〕…元帝・成帝・哀帝の三代に仕える。権力を持つ宦官や外戚と対立しつつ、『列女伝』『説苑』『新序』を著し、皇帝や宮廷内の女性の在り方を問い直す。（302頁）

・揚雄…『太玄経』『易』に擬して説く、『法言』『論語』に擬して説く

二二三、〔¹³〕…循環する五行と王朝変遷とを絡み合わせたもの。漢王朝から帝位を〔¹⁴〕（天子が位を有徳者に譲ること）という形で篡奪しようと考えていた王莽が、過去の禅譲（堯↓舜）に劉氏と自分をなぞらえ、火徳の堯（漢）↓土徳の舜（王莽）という形を作るために捏造。（禅譲は五行相生説。前王朝を討伐するのは五行相克（相勝）説。46頁）

八年 前漢滅亡。王莽は符命を捏造し、皇帝位を篡奪して、〔¹⁵〕を建国。符命を用いて政治を行いつつ、儒家の理想とした周の制度の復興を目指すが、当時の現実とはかけ離れていたために社会混乱を招き、赤眉の乱などの反乱が引き金となって頓挫、一五年の短命に終わる。

二五年〔¹⁶〕（劉秀）が後漢を建国。讖緯説を支持。儒教は讖緯説の影響を受けながら、非合理的で神秘的な色彩を帯びるようになる。国家を支える唯一の正統思想として認知。

〔¹⁷〕…儒教における礼の教えを中心として、推移・展開。

三、経学の総合化

三一、〔¹⁸〕

・〔¹⁹〕…漢代に通行した字体〔²⁰〕で書かれている。

〔²¹〕…を祖とする。『公羊伝』と緯書を重要視。『今文尚書』『儀礼』『礼記』など。一つの経書を専門とするので、学問の幅がせまく、柔軟性に欠ける。師やその学派の学説を守るため、経書全体の大意ではなく、字句の些細な違いにこだわる。

・〔²²〕…秦以前に用いられた古い字体〔²³〕で書かれている。

〔²⁴〕「を祖とする。武帝の末、魯の恭王が孔子の旧宅を壊したときに壁の中から発見（孔子旧宅壁中書）。『古文孝經』『古文尚書』など。前漢末には、成帝の命を受けて宮中の藏書を整理していた」〔²⁵〕（劉向の子）が『春秋』の古文のテキスト『左氏伝』を発見。『周礼』『左氏伝』を尊重、緯書を否定（神秘的な説を排除）。

王莽は今文を退けて古文学の博士を設置、新を建国して『周礼』を学官に立てる。後漢になると、光武帝は新を否定するために古文学を退け、五経博士は今文学派が独占。

◎〔²⁶〕「の出現：今文学と古文学を兼修した学者。」

三一、〔²⁷〕「：後漢の章帝のときに開催。前漢の石渠閣会議にならったもの。」

白虎觀に招集された今文学と古文学の儒者が経書の異同について討論、解釈の統一をはかる。

班固によって『白虎通義』としてまとめられる。↓今文学と古文学の総合的理解が進行。

三三、〔²⁸〕「：古文学を提唱した賈逵に師事、小学といわれる文字学も伝授。」

・〔²⁹〕「：今文学と古文学の間で異論の多い学説を、古文学の立場から整理。」

・〔³⁰〕「：一〇〇年に完成。当時通行した九三三三三の漢字をとりあげ、部首

によって五四〇部に分類し、それぞれの字義と字形の構造を象形・指事・会意・形声・転注・仮借のいわゆる」〔³¹〕によって解説した最古の字書。（273頁）

三四、〔³²〕「：宮中の図書を整理・校訂する職に従事した経験から身につけた知識を活かし、〔³³〕」を撰述。経書に注釈を施す。古典全般を整理し、訓詁学を大成することが目的。↓経学の総合化や今文学・古文学の折衷などの基礎を築く。

三五、〔³⁴〕「：経学を集大成。今文学と古文学を兼修。」

・『六芸論』：六経の起源と変遷の考察を通して、経書を総合化。経書と緯書の整合性を求める。

・〔³⁵〕「：古文学の立場から撰述。許慎の『五経異義』を批判。」

・様々な経書・緯書に注釈を施すが、現存するのは『詩』の注釈「鄭箋」と、「三礼」の注釈のみ。

↓経書全体の解釈の統一をはかり、経学の根源というべき孔子の真意を明らかにした。

経書は相互に補完しあって矛盾しないという信念のもと、経学による完全無欠の世界を構築。

四、批判精神の系譜

四一、〔³⁶〕「：光武帝に対して、意見書を奉る。光武帝が讖緯説に依拠して霊台の建設場所を決定しようとしたのを否定し、それによって斬殺されそうになった。」

〔³⁷〕「：人間の寿命には必ず限界があることを述べるとともに、経験的な事実に照らしながら、災害や異変は時や場所を選ばずに発生することを説き、讖緯説と災異説のもつ虚偽性と神秘性を徹底的に批判。」

四二、〔³⁸〕「：蓋天説（方形平面の地を、円形で笠状の天がおおうと考える）を否定、

〔³⁹〕（天地は卵の殻と黄身のような関係と考える）を主張。合理的な立場から、将来の予測が可能な学術を重んじる一方、讖緯説は科学的根拠のない虚妄に過ぎないと退けた。

四三、〔⁴⁰〕「――」〔⁴¹〕「――」

- ・徹底的な批判精神と厳密な実証主義。神秘主義的な災異説や讖緯説を唱えた儒者を批判。
- ・万物は陰陽二気の集散で生成。↓天に意思があることを肯定せず、天人相関思想や災異説を完全否定。
- ・万物は陰陽二気から生ずるが、人間も例外ではなく、その生死は気の集散に他ならない。
- ・桓譚以来の無神論を徹底させ、祖霊崇拜を根本とする礼教道德と国家祭祀に打撃を与える。
- ・人間の本性：天から受けた気の多少・濃淡によって、善悪の区別が生じる（一概に規定できない）。↓後代、王符や荀悦の性三品説として継承される。

・〔⁴²〕「：人間がこの世に生を受けたときに、吉凶禍福はもとより、その寿命までもが必然的に決定される。因果応報論にもとづいた当時の随命説を否定するもの。」

四四、〔⁴³〕「――」〔⁴⁴〕「――」

- ・社会秩序の混乱、刑罰の乱用、贅沢の流行などをとりあげ、原因は当時の君主にあると痛烈に批判。
- ・世界における現象はすべて気の離合集散によると考えるが、それとともに気に変化を与えるのは人間の心にほかならないとし、そのためには人間の主体的な行動、学問が不可欠と説く。
- 〔⁴⁵〕「を唱えながら、人間を上知・中人・下愚の三つに分類。」
- ・〔⁴⁶〕「を重視。儒家を自認しながらも経験にもとづき、法に道德とほぼ同等の地位を与える。」